

# 国語科教育学の研究方法論

—私たちは、何のために、何を、どのように研究してきたか、研究しているか、研究しようとしているか—

第10回教科教育学コンソーシアム研究推進委員会

2023.12.24（日）

山元隆春（広島大学）・勝田光（筑波大学）

国語科教育を何のために研究  
するか(WHY)

# 「言語批評意識」を形成する

- 1) 学習者の既有的言語知識・言語経験をリテラシー学習の潜在的態勢として重視する。
- 2) 言語知識・言語経験の拡充・改編の原理的転換をはかる。
  - \* 文学・語学領域の文化遺産を価値の体系として系統的に指導する教室から、学習者一人一人の言語学習を能力や行為の発生・展開過程として実現していく教室へと転換する。
  - \* (ジャンル・ディスコースが権威づけられている) これまでの教材(作品)から、(ジャンル・ディスコースが学習者に価値づけられていく) これからの学習材(テキスト)へと学習の対象及び目的を転換する。
  - \* 「私のテキスト」の表現活動(学習者の表現行為)を通して「作品」を学ぶ(ジャンル・ディスコースを確認する)という学習過程へと方向転換をはかる。
- 3) 1) 2) を貫く言語学習行為の編成のエネルギーとして言語批評意識を形成する。

(塚田泰彦(2003)「リテラシー教育における言語批評意識の形成」『教育学研究』第70巻4号, p.494)

# 一人ひとりの学習者の自立を促す

「これからの国語教育を考えていくためには、ことばに関わる様々な文化的変容を視野に入れた上で、**ことばの教育がいかに一人ひとりの学習者の自立を促すことができるのか**という視点が欠かせない。そうした議論を国語教育の基礎に据えて、国語科教育の目標論や学力論、あるいはカリキュラム論や評価論を展開していく必要があることを確認しておきたい。」

(府川源一郎「序 国語教育基礎論に関する研究の概観と展望」『国語科教育学研究の成果と展望Ⅲ』溪水社, 2022, p.18)

国語科教育学は何を研究する  
のか(WHAT)

# 『国語科教育学研究の成果と展望』



# 『国語科教育学研究の成果と展望』(明治図書, 2002)

- I 国語教育基礎論の成果と展望
- II 話すこと・聞くことの学習指導研究の成果と展望
- III 書くことの学習指導研究の成果と展望
- IV 読むことの学習指導の成果と展望
- V 言語事項の学習指導研究の成果と展望
- VI メディアの利用と教育
- ・ VII 国語科教育学研究方法論

- 1 国語科教育学研究における研究方法論の位置 (望月善次)
- 2 国語科教育学研究の諸相
  - (1) 理論的研究の方法論 (松崎正治)
  - (2) 歴史的研究の方法論 (有沢俊太郎)
  - (3) 比較国語教育学的研究の方法論 (藤原和好)
  - (4) 実践的・実証的研究の方法論 (島村直巳)
  - (5) 国語科授業研究の方法論 (藤原 頌)
- 3 国語科教育学研究の新展開—関連諸科学との関連を中心に—
  - (1) ナラトロジーと国語教育学研究 (松本 修)
  - (2) コミュニケーション論と国語教育学研究 (村松賢一)
  - (3) 新しい言語学と国語教育学研究 (難波博孝)
  - (4) 読者反応批評論と国語科教育学研究 (上谷順三郎)
- 4 国語科教育学研究方法論の教育
  - (1) 国内の教育—卒業論文の指導を中心に— (鶴田清司)
  - (2) 外国における教育—アメリカ・イリノイ大学大学院の場合— (佐渡島紗織)

# 『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』(学芸図書, 2013)

- I 国語教育基礎論に関する研究の成果と展望
- II 話すこと・聞くことの学習指導に関する研究の成果と展望
- III 書くこと(作文)の学習指導に関する研究の成果と展望
- IV 読むことの学習指導に関する研究の成果と展望
- V 日本語基礎事項の学習指導に関する研究の成果と展望
- VI メディア教育、リテラシーに関する研究の成果と展望
- VII 国語科教師教育に関する研究の成果と展望
- VIII 国語科教育学研究方法論に関する成果と展望
- 付録 学位取得者一覧

序 国語科教育学研究方法論に関する研究の概観と展望(有澤俊太郎)

- 1 国語科歴史的研究に関する成果と展望(八木雄一郎)
- 2 比較国語教育学研究に関する成果と展望(堀江祐爾)
- 3 文学教育研究に関する成果と展望(丹藤博文)
- 4 コミュニケーション論・文法論と国語科教育学に関する研究の成果と展望
  - (1) コミュニケーション論と国語科教育学研究(渡辺通子)
  - (2) 文法論と国語科教育学研究(山室和也)
- 5 教育社会学・教育心理学と国語科教育学に関する研究の成果と展望
  - (1) 教育社会学研究と国語科教育学研究(浮田真弓)
  - (2) 教育心理学研究と国語科教育学研究(岩永正史)
- 6 国語科授業研究・学習者研究に関する成果と展望
  - (1) 国語科授業研究・学習者研究の動向(藤森裕治)
  - (2) 社会文化的アプローチの展開(藤原 顕)
  - (3) 授業研究・学習者研究の記録と分析(渡部洋一郎)



# 『国語科教育学研究の成果と展望Ⅲ』（溪水社, 2022）

- I 国語科教育基礎論に関する研究の成果と展望
  - II 話すこと・聞くことの学習指導に関する研究の成果と展望
  - III 書くこと（作文）の学習指導に関する研究の成果と展望
  - IV 読むことの学習指導に関する研究の成果と展望
  - V 日本語基礎事項の学習指導に関する研究の成果と展望
  - VI メディア・リテラシー、マルチモーダル・リテラシー、デジタル・リテラシーの学習指導に関する研究の成果と展望
  - VII 国語科教師教育に関する研究の成果と展望
  - VIII **国語科教育方法論に関する研究の成果と展望**
- 付録 学位取得者一覧

- 序 国語科教育研究方法論の成果と展望（山元隆春）
- 1 国語科歴史研究に関する成果と展望（菊野雅之）
- 2 比較国語教育学研究に関する成果と展望（山元隆春）
- 3 国語科教育学の理論的研究に関する成果と展望（森美智代）
- 4 関連諸科学と国語科教育学に関する研究の成果と展望
  - (1) 社会学・教育社会学と国語科教育学研究（石田喜美）
  - (2) 心理学と国語科教育学研究（濱田秀行）
  - (3) コミュニケーション・情報の科学と国語科教育学研究（澤口哲弥）
- 5 国語科授業研究・学習者研究に関する成果と展望
  - (1) 国語科授業研究に関する成果と展望（迎 勝彦）
  - (2) 国語科学習者研究に関する成果と展望（藤森裕治）
- 6 国語科インクルーシブ教育に関する研究の成果と展望（原田大介）

# 『国語科教育学研究の成果と展望』にみる 研究対象の推移(1980～2022)

- ① I (2002)のみ「国語科教育学研究方法論の教育」(国内の教育、外国(米国)における教育)を立項している。
- ② II (2013)から「学習者研究」のレビューが加わる(Iでは、「読むこと」の章に「学習者論的アプローチ」「発達論的アプローチ」のレビューがある)。IIIでは独立した項目に。
- ③ II以降「国語科教師教育」の項を設ける。Iでも「国語科授業研究の方法論」「国語科教育学研究方法論の教育」の項でレビューがある。
- ④ III (2022)で「国語科インクルーシブ教育」の項を設ける(学習者の多様性を考える、新たな研究領域)
- ⑤ Iの「言語事項」がII・IIIでは「日本語基礎事項」になる(「日本語学」「日本語教育」への視野、学習指導要領の領域構造の変化)。

国語科教育学はどのように研究されているのか(HOW)

# 1 教科教育の研究方法

- ① **哲学的・原理的方法**（教科の存立の基盤、教科を教える必然性、教科編成、カリキュラムなどについて哲学的・原理的に研究する。）
- ② **歴史的方法**（教科教育に関わる過去の教育理論や実践事例などを整理し、分析・評価する。）
- ③ **比較教育的（または国際比較的）方法**（主に、諸外国における資料に基づき比較をおこない、類似性・異質性あるいは特徴を明確にする。）
- ④ **実験的・実証的方法**（授業実践や調査に基づいて、開発した指導法の効果検証や、学習者が形成している概念の把握などをおこなう。）
- ⑤ **実践的方法**（実際の授業の構成や展開などについて記述的に整理し、教材の特色や学習者の反応などについて考察する。）

[①～⑤の項目は松村（1986）、（ ）内は松浦（2015,p.105）]

## 2 国語科教育学の研究手法

(1) **文献学的方法**・・・「基礎的な研究法」／「国語科歴史研究」及び「比較国語教育学研究」／「解釈や批評という高次の作業ともなだらかに連続している」

(2) **関連諸科学の方法論による理論的研究**・・・基礎となる「文献学的方法」と、近年その必要性を増してきた「実験的・実証的方法」との両方の基礎づけを果たすもの

(3) **国語科授業研究・学習者研究の方法**・・・「実験的・実証的方法」による研究

(有沢俊太郎, 2013)

# 3 学会としての研究成果の公開

## ① 課題研究報告書

- 1 『国語学力調査の意義と問題』（明治図書、2010年）
- 2 『国語科教師の実践的力量をどう育むか』（学会誌『国語科教育』第71集(2012年3月)に掲載）
- 3 『国語教育研究手法の開発』（学芸図書、2015年）
- 4 『国語カリキュラムの再検討』（学芸図書、2016年）
- 5 『国語科教育における理論と実践の統合』（東洋館出版社、2018年）
- 6 『国語教育における調査研究』（東洋館出版社、2018年）
- 7 『国語科教育を問い直す』（東洋館出版社、2020年）

# 4 学会としての研究成果の公開

## ②公開講座ブックレット

- 1 『国語科授業分析研究の方法』（2011年3月1日）
- 2 『国語教科書研究の方法』（2012年2月29日）
- 3 『国語教科書研究の方法—国語教科書のいまとこれから—』（2012年3月31日）
- 4 『国語科教材研究の方法—伝統的な言語文化・文学教材（現代文）—』（2013年2月10日）
- 5 『国語科説明文教材の研究—教材研究・開発・授業研究—』（2017年10月31日）
- 6 『「考えること」の指導研究—考える力とその方法／学習の可視化—』（2017年12月27日）
- 7 『国語科の授業づくりと評価を考える』（2018年3月26日）
- 8 『国語科授業の単元的展開—言語活動の充実を図る単元づくりの手法/学びをどう見とるか—』（2018年3月31日）
- 9 『対話のある国語科授業づくり』（2018年3月31日）
- 10 『インクルーシブ教育とアクティブ・ラーニング—教室のなかの多様性/多言語・多文化と授業づくり—』（2018年3月31日）
- 11 『学校で取り組む国語科授業研究の展開』（2019年12月25日）
- 12 『国際バカロレアにおける「言語と文学」「文学」の授業から国語科のあり方を考え直す』（2020年10月30日）
- 14 『詩を書くことは教えられるのか』（2023年6月17日）

# 5 国語科教育研究この10年の変化 –「学習者研究」を一例として–

・藤森裕治「国語科学習者研究の成果と展望」（2022）『成果と展望Ⅲ』

◆『国語科教育』（全国大学国語教育学会）『読書科学』（日本読書学会）を対象とした考察

①量的研究から質的研究への移行（2000年頃から）

②実践開発における質的分析で採用された方法論は、主として談話分析と記述分析。開発された実践を教育実践場面に適用し、そこで観察・収集した談話記録や学習者の記述を1次資料として、解釈的に分析する形態が主流となっている。

③量的分析で採用された方法論には、Z検定、t検定、重回帰分析、共分散構造分析、コーパス分析などがある。



# 藤森 (2022) p.545 『国語科教育』 『読書科学』 掲載論文における研究目的と方法

## 表2 研究目的

	国語科教育	読書科学
実践開発	27(48%)	9(20%)
実態調査	17(30%)	10(22%)
実験研究	4(7%)	24(53%)
方法論	8(14%)	2(4%)
計	56	45

## 表3 研究方法

	国語科教育	読書科学
量的分析	5(9%)	27(60%)
質的分析	30(54%)	15(33%)
混合分析	17(30%)	3(7%)
文献調査	4(7%)	0(0%)
計	56	45

③2010年以降の学習者研究では、特別支援対象者(学習障害・発達障害)・LGBT・日本語非母語話者を対象とした論文が散見される。また、幼児や国外の学習者など、対象の属性範囲を縦・横に広げようとする論文も増加している。

④文学的文章における学習者研究について、2010年までは読者反応理論やナラトロジー（物語論）を背景としたものが大半を占めていた。これに対し、2010年以降は、アプロプリエーション、ファシリテーション・グラフィック、・ワークショップ、ヴィゴツキー スペース、プリズムメソッド等の概念・方法論を伴った多様な研究アプローチが提案されている

- ⑤説明的文章の読みにおいては、テキストの論証過程を可視化して、学習効果・学習実態検証するものが多い。
- ⑥話し合いにおける学習者研究では討議・討論の研究が中心。その中で「図示化メモ」「パターンランゲージ」「協同性の促進」「根拠産出トレーニング」「学習者の音声データ教材化」等のたアプローチが考案され、テキストマイニング、談話分析等の分析方法を用いた効果検証が行われている。
- ⑦「書くこと」における研究は、説明的文章と物語・詩歌とに分かれるが、対話を取り入れた実践の効果を記述と談話記録から分析するものが両者に見られる。説明的文章については実態調査を目的としたものが多い。創作では実践開発のアプローチを設定し、その効果を検証するものが散見される。

⑧少数ではあるが、国際学会でのシンポジウムでの研究発表や、国際的な査読付き学会誌に掲載された論文もある。国語科教育学研究において貴重な成果である。

Kamitani, Junsaburo, Adachi, Sachiko, Iida, Kazuaki, Fujimori, Yuji & Ari Yoshinaga. (2017) “Comparative Studies of Literacy Education among JAPAN, EUROPE, and AMERICA in the 21th century,” European Conference on Literacy, July.

Katsuta, Hikaru. & Eisuke Sawada(2021) “Encouraging Independent Readers: Combining Reading Workshop and Textbook-Based Lessons in a Japanese High School Classroom,” *Journal of Adolescent & Adult Literacy*, 64(5), pp.563-573.

# 国語科教育学研究方法論 の課題

- ①研究方法（「構築主義」（解釈アプローチ、批判的アプローチ）の立場と「論理実証主義」の立場との関係をどう考えるか）
- ②データ収集・分析の考え方（質的データと量的データにどういうふうに取り組むか）
- ③研究対象の見極め（教師のどのような行為を対象とするか、「学習者」の多様性をどのように扱うか）等の課題
- ④従来「文献学的方法」を基礎としていた歴史研究・比較研究においては「国語教育」の事実をどのように捉えるのかという課題に取り組む必要性の検討、従来明らかにされてきたことの捉え直しの可能性（国語教科書教材とされてきたテキストの再検討等）。

箕浦康子(2015)「文化人類学は国語教育学研究に何を提供できるかーフィールドワークの手法を中心にー」『国語教育研究手法の開発』学芸図書, p.24

	論理実証主義的アプローチ	解釈的アプローチ	批判的アプローチ
研究の目的	行動や社会を律している普遍的な法則の定率。知見の一般化	特定状況における行動の規則性を理解し共有する。知見の比較	結果を分析し、不平等をあばき、解放のスタンスを育む
研究の焦点	観察可能な行動に着目。客観的に「測る」ことに力点	行動や状況に埋め込まれた意味に着目。「分かる」ことに力点	不平等な社会構造や抑圧のパターンを「変えていく」ことに力点
研究のプロセス	条件統制をしえノイズを除去し、因果関係を把握することが中心。変数操作が主な研究技法	人と人、人と状況やモノとの相互作用やそこで伝達される意味を分析し、理解することが中心。	隠された権力による統制を明らかにする
研究者のスタンス	客観的であること。研究対象者との間に距離をとる	調査参加者の居る場シヨン参与。主観的であることを厭わない	研究者は、対象から学ぼうとする学習者、かつ批判的意識の覚醒を促す教師
対象者の位置づけ	研究者の指示に従う受動的な存在	研究対象者は能動的な協力者	一緒に学ぶ学習者。研究者にとっての教師
主なデータ収集法	数量的データを得るための実験や調査	質的データを得るためのフィールドワーク	量的、質的どちらのデータでもかまわない

⑤国語科教育研究を取り巻く社会的・文化的状況や教育政策・制度的な環境との関わりを意識した研究方法の開発・・・宮本(2017)で指摘されているように、「教育現場における「実習（実践）」を行い、「省察」を通じた気付きに基づく理論の再構築、新たな実践理論の構築」は「教職大学院」での研究と教育の主眼である。そこで重んじられている「実習」と「省察」の内実をどのように明らかにしていくのかということとは、国語科教育学研究方法論上の重要な課題であり続けてきた。「教職大学院」でのとくに教育実践開発の領域において、国語科教育研究がどのような貢献を果たすのかということの究明は、これからの10年の本学会における重要な課題の一つであると同時に、国語科教育学研究の核心部分である。



# おわりに

## －学びの「熱中」をつくり出す「相互関連性」の発見

◆今学びつつあることと過去に学んだこととの「レリバランス（関連性）」「相互関係」を学習者に意識させることが効果的な指導を生み出すための大切な条件であり、「相互関係性(interconnectedness)」をつくり出すことこそ効果的で力のある(effective)カリキュラムと指導の特徴(Applebee, 2002, p.32)。

◆幅充孝(2023)・・・ブックディレクター。「インタビューワーク」（「実際の本を眼の前に置き紹介しながら、読み手の話を聞く」）

彼が少年時代に熱中したR・L・スティーブンスンの『宝島』について熱く語る幅の話が子どもたちに響かない。そこで幅は「みんなの好きな海賊の話を教えて」と語る。と、「子どもたちは急に目を輝かせながら『ONE PIECE』!!」とベストセラー・コミックのタイトルを答える。これをきっかけに、幅が『宝島』と『ONE PIECE』とを関連づけながら話を始めたところ「航海上の冒険や紆余曲折、仲間の裏切りなど、『ONE PIECE』と関連づけられそうなポイントを少しずつ説明すると、先ほどまで残酷なほどに無関心だった子どもたちが、ちょっとだけ興味をひらいてい」（幅, 2023, p.179）くことになった。この経験をもとにして幅は「彼らは、動物的直感も駆使しながら自分に関係ないものを掻き分けて、前へ進んで行こうとするのですが、そのときに彼らが両手を伸ばした範囲から溢れ落ちてしまう『関係ないこと』を、どうやって『関係あること』に変容させていくのかが、本という遅効のメディアを伝えるうえでは大切だと考えます」（幅, 2023, pp.179-180）と言う。→子どもにとって「関係ないこと」を「関係あること」に変容させていくためにどのように「相互関連性」を創出（幅はそれを「結節点をつくる」と言う）することができるのか。学びの「熱中」をつくり出す鍵になると思われる。

# 文献

- Applebee, Arthur N.(2002) “Engaging Students in the Disciplines of English: What Are Effective School Doing?” *English Journal* July, pp.30-36
- 幅充孝(2023)『差し出し方の研究』弘文堂
- 松浦拓也(2015)「教科教育学の研究領域と方法はどのようなものか」日本教科教育学会編『今、なぜ教科教育なのか』文溪堂
- 松村幹男(1986)「教科教育研究の領域と方法」広島大学教科教育学研究会編『教科教育学Ⅰ 原理と方法』建帛社
- 宮本浩治(2017)「教職大学院における教科教育研究」日本教科教育学会編『教科教育学研究ハンドブック』教育出版